

アーガー・ハーン教育事業のパーキスタン教育における役割

佐治 雅之

はじめに

パーキスタンの教育水準は、識字率 51.6 パーセントという数字が表すように低迷している。本論文は、この低い教育水準を改善するために、近年同国の教育において大きな役割を果たしている非政府組織（Non-Government Organization = NGO）の 1 つであるアーガー・ハーン教育事業（Aga Khan Education Service=AKES）の活動内容を明らかにする。AKES の活動を、パーキスタンにおける 1 つの教育普及の事例としてとらえ、AKES がパーキスタンの教育に与える影響とその役割、問題点を考察する。

パーキスタンにおける教育とその重要性

パーキスタンでは、教育の普及は独立当初から重要視されていた。建国の父、ムハンマド・アリ・ジナーも「国家の発展にとって欠かすことの出来ない要素である」と認識していた。それにも関わらず、建国から半世紀以上経つ今なお、初等教育に相当する 5～9 歳の子供の約半数は学校に通っていないのが現状だ。

パーキスタン政府は、これまで教育の普及に関する政策は行なわなかったのであろうか。政府は、ジナーが開いた 1948 年の最初の教育に関する協議会以降、いくつものプログラムを立ちあげ、教育の普及に努力を傾けた。しかし、パーキスタンは分離独立から

続く慢性的な経済の低迷、バングラデシュのパーキスタンからの独立、イギリスからの独立後約半数の年月におよぶ軍事政権、民族問題などの多くの国内問題を抱える。それに加えて、隣国インドとは独立以来 3 度の戦争を行ない、アフガニスタンからは多くの難民が押し寄せ経済を悪化させた。こういった国際社会における問題が山積みされる中、パーキスタン政府には教育に大きな努力を注ぐほどの政治的・経済的余裕は残されていなかった。さらに、教育の重要性を明確に認識していたジナーを、建国後まもなく失ったことも教育普及の大きなブレーキとなったと考えられる。

オックスファム（OXFAM）の報告によると、教育とは人間の持つ可能性をより大きく引き出すことであり、また人間が暮らして行くなかで必要な知識と方法を与えてくれるものである。このことから教育の普及が、特に開発途上国といわれる国においては、非常に重要なことは疑う余地がない。また、パーキスタンでは、インド亜大陸の土着文化である「パルダ（幕、カーテンを意味する）」と呼ばれる女性隔離の風習の影響や、イスラーム諸国に多く見うけられる傾向で女性を人目にさらしたがることによって、教育における男女格差が大きい。

女性に対する教育の普及は、女性の仕事が家庭の中のことを中心に行なうという傾向か

ら、パーキスタンではあまり重要視されてこなかった。しかし、逆に育児という子供の将来を左右する大切な仕事を女性が果たす中で、女性への教育は、3RSと呼ばれる読み書き、そして計算能力の習得のみに留まらず、育児時の衛生問題や食事における栄養バランスなど子供の成長にとって非常に重要なものとなる。このことは、「ガーナでは教育を受けた母親の子どもが5歳まで生きる確率は、教育を受けていない母親の子どもの倍になる。パーキスタンでは1000人の女子があと1年間学校に通えば、60件の乳児の死亡を予防することが可能だと言われている」というオックスファムの報告からも明らかである。しかし、実際にはこの国ではいまだに教育における男女の格差は大きいままである。

パーキスタンの教育における問題点は、ジェンダーギャップのみに留まらない。パーキスタンは、民主主義国家として独立したにもかかわらず、独立から現在までのおよそ半数の年月が軍事政権下にある。パーキスタンの軍事クーデターは、諸説さまざまだが、一般的には1度も血が流れたことがないと解釈される。しかし、いくら血が流れたことがないとはいえ、力によって民主主義を否定し、軍が政権の座についているのである。それがいかに政治家の汚職や腐敗を正すものであったとしても、そこには正当性はない。歴代の軍事政権は、自身の政治指導権に正当性を持たせるために、しばしばイスラームに訴えた。イスラームを強化することによって、正しいことを行なっていると国民に認識させることを目指した。ムスリムが97パーセント以上を占めるこの国で、イスラーム強化を行なう指導者を非難することはまず有り得ないことである。このイスラーム化は、当然教育にも影響し、教育におけるイスラーム化は国内の

教育普及にとってはしばしば妨げとなった。また、イスラーム化は女性の教育への参加の機会も制限する結果を招いた。

国内のこういった動きを受けて、エリートや裕福層の人々は、国内での教育に見切りをつけて、海外での教育に次第に憧れを強めていった。これは、現在も大きな問題となっており、「Aレベル」「Oレベル」といった、イギリスのケンブリッジを中心とした教育システムの普及をうながし、パーキスタン国内の大学をはじめとする高等教育機関は、発展機会を失ってしまっている。こうして「頭脳の流出」という現象が起り、経済的發展にも大きく影響を及ぼしている。隣国インドでの「インドのシリコンバレー」と呼ばれるバンガロールの発達などと比べると、そこには大きな差が生じていることが分かる。

また、このように国内教育に信用がない状況から、パーキスタンでは教員、研究専門家に対する地位が非常に低いという現状がある。そもそも教育における重要性の認識が薄い社会において教員や研究者の地位が保証されるはずもなく、これが教育提供者の教育における意識の低下を生み、学校は存在し生徒も学校に来ているのに、先生があまり学校に来ないというような状況も、特に農村部において多く起こっている。これと関連して、都市部と農村部の教育格差も深刻な問題である。パーキスタンの農村部では、学校数の絶対的不足から片道1時間も2時間もかけて学校に通う子供も多く、そのような子供達は教育からの離脱率も必然的に高くなる。また、せっかく学校に来て先生が来ない状況では、それはさらに加速することは止められないであろう。また、農村部では子供も立派な働き手として認識され、親が子供の働きをあてにし、その結果子供自身も教育を受ける

よりも、働いて家族を助ける道を選ぶものが少なくない。しかし実際には、アフリカの子どもが1年間学校に通うごとに、その子が大人になったときの農業生産率は8パーセント増加するといわれる例が示すように農業と教育もまた無関係ではない。この8パーセントという数字は、貧困層の人にとっては薬や食糧が買えるかどうかの違いなのである。

イスマール派とアーガー・ハーン開発ネットワーク

イスマール派は、シーア派の中でイランの国教である12イマーム派の次に大きな宗派であるが、これまで歴史研究の中では正統派とされるスンニー派への対抗勢力として、またイスラームの過激派としてその名を広めてきた。特に12～13世紀にアラムートを中心にペルシアやシリアの各地に山城を築き、多くのムスリム君主や十字軍を震撼させた「アサシン」は強烈なインパクトを与え、いまだにイスマール派というと「暗殺者の末裔」と記述されることがある。

しかし実際には、イスマール派はその成立から非常に複雑な歴史を経験し、アラムート期のイスマール派はその1部分でしかない。さらにこの時期の活動により、以後他宗教、他宗派からの迫害を恐れ、イスマール派は歴史から身を隠す。アラムート期の後に歴史の表舞台にあらわれたのは19世紀後半になってからで、その後イマームのインドへの移住、ホージャ・コミュニティとの遭遇を期に彼らの歴史は再び動き出すこととなる。これが現在のパーキスタンを中心に活動するイスマール派の1派の基礎となった。正式名称は「シーア・イマーミー・イスマールイー」で通常は単にイスマール派と呼ばれる。

ムスリム連盟の創設に尽力し、パーキスタン建国にも大きな役割を果たした、第48代イマーム、アーガー・ハーン3世は、イスマール派コミュニティにおける自身の地位の獲得とともに、パーキスタンにおけるイスマール派の地位を確かなものにした。それを継いだアーガー・ハーン3世の孫にあたり、現第49代イマーム、アーガー・ハーン4世は、宗派のヒンドゥー色の払拭とともにイスラーム中道への歩み寄りを図ると同時に、宗派内部の組織を大幅に再構築した。さらに社会開発、経済開発および文化振興の分野で大規模な活動を展開するNGO・企業群は、アーガー・ハーン開発ネットワーク(Aga Khan Development Network = AKDN)を形成し、特にパーキスタンでは卓越した影響力を持っている。本論文で扱うAKESは、このAKDNの一部であり、そのなかで主に教育普及を扱う団体である。

アーガー・ハーン教育事業 (パーキスタン)

低迷しているパーキスタンの教育に、大きな変化をもたらす1つのNGOがある。それがAKESである。AKESはパーキスタンをはじめ、バングラデシュ、インド、ケニア、シリア、タジキスタンそしてウガンダに教育施設とプログラムを持っている。幼児教育から高等教育まで直接教育を提供し、寮や奨学金などの教育援助サービスを通して大学など高いレベルの学問へのアクセスを促進する。

AKESの教育普及の大きな柱は、①基礎教育の普及 ②設備の充実 ③女子への教育の普及 ④教員の質の向上 ⑤教育普及の地域格差の減少があげられる。AKESが着手する事業は、まさにパーキスタンの教育に欠けているものであり、教育省が分離独立以来、教育普及の柱としてきたものと一致する。特

に基礎教育の普及と女子への教育の普及は、政府が長い時間かけて行ってきたが、なかなか結果が出せなかった分野である。

AKES・パーキスタン（＝AKES-P）の学校での男女比は、男子生徒37パーセントに対して女子が63パーセント、コミュニティ・ベースの学校では男子40パーセントに対し女子60パーセントと圧倒的に女子への教育普及率が高いことが分かる。AKES-Pのある学校の先生は、インタビューの時に「パーキスタンで一番教育普及率が高いのは、もしかしたらこの山奥なのかもしれない」と言っていた。では、パーキスタン政府が長い時間かけても達成できなかったこの教育普及を、AKESはこの山奥でどのようにして果たすことが出来たのだろうか。

その答えはAKES-Pのプロジェクトの地理的状况とイスマール派の分布状況を照らし合わせてみるとはっきりと分かる。この2つは非常に高い割合で一致する。つまり、AKES-Pの活動が盛んで学校が多く建っているところは同時にイスマール派の多住地域なのである。

このことは、暗にAKES-P、ひいてはAKDNの活動は、そもそもイスマール派の発展を目指したものだということを意味する。AKES-Pの事業は、海外から非常に高い評価を受けている。事実、AKES-Pはこれでパーキスタン政府が長年目指した基礎教育の普及と女子の教育参加率の向上に成功している。しかし実際には、その活動のほとんどの場合がイスマール派のための活動となってしまうのではないだろうかという疑問は払いきれない。

イスマール派の近年の活動を見てみると、対外的には極力宗派色を消してNGO活動に取り組んでいるように見せるが、他方北

方地域に行ってみると、イマームの権威は非常に強く、生活の隅々にまでそのイマームの権威は行き届いているように見える。そして、対外的に中立を掲げるNGO活動も注意深く見てみると、その活動内容は宗派の利益を模索したものであることは明らかなように思われる。この外面の顔と内面の顔を上手く使い分けて活動を展開してきたのがAKES-Pの事業の特徴だといえる。

最近、AKESは活動を、幼児教育と高等教育の充実に傾けようとしている。そのことは、近年AKESが立て続けに高等学校を開き、さらに2～3の高等学校建設計画を持っていることから明らかであろう。また、アーガー・ハーン大学（Aga Khan University＝AKU）は、独自の教育委員会を持つことを許された。内容によっては、これまで政府の教育方針に則って行なわれていたAKES-Pの学校運営、カリキュラムも独自に変更することが可能となる。今現在は、新しい委員会の内容は不明だが、AKES-Pにとっても今後大きな転機が訪れる可能性が高い。

このAKES-Pの今後の活動展開は非常に興味深いものである。また、近年AKES-Pにおいては教員育成の分野で、AKDN全体を見ると農村復興事業（Aga Khan Rural Support program）において政府との関係は機密になろうとしている。もし、この政府とAKES-PやAKDNの関係がこのまま良好に進んだならば、再びイスマール派のイマームがパーキスタンの政治に大きく関与する日も遠くないかもしれない。今後の同派の活動にも注目していきたい。